

問いを鍛える：フィールドと理論を往還する探索的研究

福井, 令恵

<https://doi.org/10.15017/7388822>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，pp.81-92，2025-10-01．三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン：
権利関係：



問いを鍛える

——フィールドと理論を往還する探索的研究——

Cultivating Research Questions: Traversing Fieldwork and Theory

福井 令恵

◎本章のねらい

フィールドワークを通じて研究の問いを構築・精緻化するプロセスを、筆者自身が長期紛争を経験した社会で行った集合意識・記憶に関する調査をもとに例解的に示す。それにより、社会学やその周辺領域にまたがる研究に取り組もうとする読者が、現場での発見を理論的枠組みに位置づけながら、自らの問題関心を問いとして形成する手がかりを得ることを目的とする。

◎とくに読んでほしい人

記憶研究、メディア研究、政治社会学などの分野において、複数の技法を用いて質的調査を行うことを考えている人。とりわけ、壁画のような伝統的な言論メディア以外の視覚資料や表現を、どのように分析枠組みに組み込むかを模索している人におすすめしたい。

1. はじめに：問いをいかに立て、精緻化するか

本稿の目的は、社会学およびその周辺領域にまたがる研究に取り組もうとする大学院生に向けて、研究の初期段階でどのように問いを立て、それを精緻化していくのか、そのプロセスを具体的に共有することにある。筆者は、北アイルランドという紛争〈後〉社会における地域住民の集合的記憶を対象とし、特に「壁画 (mural)」という視覚的メディアを通じて、長期にわたる対立の経験とその後の変容を分析する研究を行ってきた。

本稿では、その過程で直面した試行錯誤——問題関心の芽生えから問いの絞り込み、先行研究や理論との接続、そしてフィールドワークの経験を通じて問いを修正するプロセス——を示すことで、同様に探索的な研究を志す読者にとってのひとつの参考材料となることを目的としている。こうした試行錯誤は通常完成した論文などには書かれることはほとんどない。し

かし、とりわけ探索的な研究では、この試行錯誤の繰り返しは不可避なものであるだろう。

当初筆者は、武力対立を経て和平合意を締結した後の社会が、時間はかかるかもしれないが〈対立〉から〈和解〉へと直線的・単線的に進むという素朴なイメージを抱いていた。20世紀末に和平合意の機運が高まった北アイルランドは、和平が比較的成功した事例としてとらえられることが多く（立川 2000）、パワーシェアリングという権力の分有方法の制度的枠組みの有効性が政治学・国際関係論の分野で検討されてきた（南野 2017）。筆者は制度的に和平へ向かう流れが決定した社会で、住民の感情や集合意識もそれに伴って、大きく和解に向けて変化するのではないかと期待していた。

しかし、実際のフィールド調査において、そのプロセスは決して単純ではなく、期待を裏切られる場面に何度も遭遇した。壁画に描かれるメッセージやモチーフには、和解を志向する表現だけではなく、紛争の記憶、敵対的な主張、二項対立的なアイデンティティの強調といった内容も含まれていた。そこで筆者は、制度や政策の次元にとどまらず、壁画を媒介として表出する住民の集合的記憶に着目することで、制度では捉えきれない感情の複雑な層を明らかにできるのではないかと考えた。

とりわけ本研究では、壁画というメディアにおける記憶の〈生成〉プロセスに注目する。壁画のような視覚メディアによって、いかに集合意識は可視化・共有化されるのか、あるいは、特定の記憶が排除・忘却されていくのか。その動態を分析することによって、ナショナル・アイデンティティや戦争の記憶といった視点だけではなく、より複雑かつ多層的な集合意識のありように迫ることが出来ると考えた。

中心的には、以下のような問いを考究することになった：

「長期の対立関係にあった住民集団は、和平合意後にどのような集合意識を形成しているのか？そして、その意識は壁画というメディアにいかに表現され、どのように想起され、ある集合的記憶が定着／変容していくのか？」

この問いは、当初から明確にあったわけではなく、むしろ現地での観察や調査、先行研究との対話を通じて、徐々に形づくられていったものである。

2. 問題関心の形成：関心から研究の問いへ

筆者が大学院での研究を始めた当初、明確な問いや分析対象を決めていたわけではない。「紛争後の社会における平和構築」という漠然とした興味を手がかりに、これを研究テーマにでき

ないだろうかと考えていた。北アイルランドに留学していた経験や、1998年の和平合意という歴史的転機を目の当たりにしたことが、その関心の出発点であった。

特に和平合意という軍事的・政治的合意が成された一方で、住民の間には複雑な感情や緊張感が残っている点は、重要な社会的な課題であるように思われた。30年という長期の紛争後、合意が結ばれたからといって、すぐに対立関係に置かれた住民集団間の〈和解〉が実現するわけではない。むしろ合意後の住民集団間関係がどうなるのか、そこに問題意識をもった。

しかし、当時の筆者は「住民の関係性を明らかにする」といっても、具体的に何をどう調べればよいのか、方法もアプローチも曖昧なままだった。北アイルランドについての先行研究にあたってみると、北アイルランド紛争や対立の構図に関する研究（e.g. Arthur and Jeffery 1996＝2004）や、和平合意に至るまでのプロセス、政策研究やポスト植民地主義の観点からの研究は数多く存在していたが（日本語のものとしては、堀越 1996；松井 2008；尹 2009 など）、和平合意後の住民間の関係性や感情、特に記憶のありかたに焦点をあてた研究は当時まだ少なかった（尹の研究〔2007〕は、歴史的に支配者側にあった住民集団の心理を扱い、同時期の研究にはあまり見られない視点を含んでいた。また、のちになるが、2015年に酒井が紛争記憶を住民がどのように想起するのかに関する研究を発表している）。

住民間関係についての手掛かりを求めて、他国の事例に目を向けてみた。国民的和解というキーワードから、南アフリカの真実和解委員会（TRC）の活動と移行期正義という概念にふれ、伝統的応報（処罰）を超えた、被害者と加害者の関係修復やコミュニティの癒しを目指す試みが導入されていることを知った（阿部 2007）。とくに〈移行期〉という概念は、和平合意という政治的・軍事的区切りを絶対的な地点ではなく、相対化する枠組みを提示するものであり、そこに生きる人々の暮らしという観点からも重要なものであるように思われた。和平合意後も、制度的には大きな変化はあったものの、敵対してきた住民集団同士が隣り合って暮らすという「日常」が続く北アイルランドでは、制度面だけではなく、感情や記憶といった、より生活に根ざした領域を探る必要があると感じた。

また、当時注目されていたナショナリズム研究、とりわけ〈ポストナショナリズム〉や〈多元的アイデンティティ〉の概念（立川〔2000〕は北アイルランドの事例をもとにこの点について論じている）も、筆者の関心領域と重なっていた。北アイルランドの住民たちは、「これまで通り連合王国の一部として留まる／アイルランド統一を目指す」という国家的帰属意識をめぐって、複雑なアイデンティティを抱えている。そうした集合意識の揺らぎや葛藤をどのように

捉えるのが、次第に自分の問いの中心になっていった。

このようにして、当初の漠然とした関心は、次第に「和平合意後の社会における住民の集合意識」に関する問いへと絞られていった。軍事的・政治的決着のあとに残された記憶や感情が、いかに再構成され、共有され、あるいは分断を再生産していくのか。それを探ることが、自分の研究の中核であると考えようになった。

課題 1) 漠然とした問題意識（広すぎる問題意識）から、研究テーマを絞っていくには、あなたの問題関心が、どの理論枠組みを用いて位置づけられそうか、検討することが必要になる。もちろんそれは研究の進展とともに更新され続けるものであり、後に変更されることも多いが、この検討なしにフィールドに出かけるのは、羅針盤がない状態で航路に出るのと同様なのでおすすめしない。手掛かりになりそうな理論は何だろうか。

3. フィールドでの発見と問いの再構築

問題関心がある程度絞れてきたとはいえ、はじめての本格的なフィールド調査は、何ができるのか不確かな状態での出発だった。調査地としたのは、紛争時代に対立の中心地であった北アイルランドの第一都市ベルファストである。紛争の経験の仕方は、同じベルファストでも地区によって大きく異なる。そのなかでも、紛争の被害が最も大きく、また和平合意後も感情的な対立が残るとされる地域に足を運んだ。

調査を始めてまず直面したのは、調査対象へのアクセスの難しさだった。当時、和平合意から数年しか経っておらず、住民の外部者に対する警戒心は強い。またコミュニティで起きた出来事を語ること自体が、大きな心理的負担となることは容易に想定できる。紛争をより直接的に経験した地区に住む住民に対してインタビューを試みることは、現実的には非常に困難であったし、適切であるとも思えなかった。

そこで筆者は、和平合意後に導入されたばかりの観光バスやタクシーツアーを利用して地域を大まかに見てまわり、全体の雰囲気や位置関係を把握したうえで、地域を歩いてみることから始めることにした。住民の暮らしが営まれている空間を歩き、日常の生活風景を観察し、過去の出来事や住民の感情がどのように現在と結びついているのかを外側から理解しようとした。街角などで住民同士交わされている会話を聞き、住民に話しかけられた際は、何気ない日常の会話をし、少しでも地域生活を知る手がかりにしようとした。

このフィールドワークの過程で、地域に描かれた壁画に注目した。北アイルランドの壁画は、もともとは造船業に従事していた労働者が始めた活動であり、建物の塀や壁など屋外に描かれ、北アイルランドで100年以上の歴史がある（Rolston 1992）。紛争時代には、死傷者数の多い地域、それゆえ和平合意後も対立感情の強く残っている地域に多数描かれ、描き手はしばしばその地域の住民であるといわれていた。そうであるならば、紛争をより直接的に経験した「当事者」のメディアと捉えることができるのではないかと。統計資料をあたってみると、紛争時代に被害の大きかった地区と、貧困（剥奪）水準の最も高い地区、壁画のある地区は、重なるところが多いことが確認できた。

壁画は単なる装飾ではなく、紛争の記憶や政治的メッセージ、共同体の物語を語るメディアであり、見るものに強い印象を与えるメディアである。そこでは武装した人物の肖像、死者を悼むメッセージ、宗教的象徴や歴史的出来事を描いたものなど、多様な主張が描かれ、可視化されていた。筆者は、この壁画に集合的な記憶や住民の感情があらわれているのではないかと考えた。そしてそれが、対立や和解といった感情の構造を理解するうえでの重要な手がかりになるのではないかと考えるようになった。

しかし、この段階ではまだ、壁画をいかに調査対象として扱うか、具体的な分析の視点は明確ではなかった。そこで、筆者はまず、以下のような問いを立てた：

- 壁画は誰によって描かれ、維持されるのか？（各壁画の描き手が誰なのか、資金提供者はどういった人・団体か、地域住民はどの壁画にどの程度関わっているのか？）
- 壁画に表現された記憶や感情は、どのように共有/忘却されていくのか？
- テーマはどう決定されているのか？住民たちはそれをどのように「読む」のか？

このようにして、筆者の研究の焦点は、「和平合意後の住民の集合意識」という当初の関心のもとで、それを把握するための媒介として「壁画を通して生成される記憶」に注目するようになった。言い換えれば、壁画という視覚的メディアがいかにして特定の出来事や事柄を取り上げて表現し、それがコミュニティで受け入れられ、共有されているのかを見ることを通じて、住民の集合意識を明らかにしようとするアプローチへと展開したのである。

壁画は、単なる作品ではなく、コミュニティが語る物語の断片であり、しばしば忘却されがちな記憶や感情を公共空間に定着させる機能をもっている。そうした壁画の生成のプロセスを丁寧にたどることで、目に見えない住民の集合的感情、アイデンティティ、対立や共感のありようを、より具体的かつ動態的に捉えられるのではないかと予想した。

課題2) フィールドへ出かけよう。そこで興味深い発見はあっただろうか。その発見は、どういった点で、学術的な意義や面白さがあると考えられるだろうか。

4. 先行研究と理論的枠組みの選定

壁画というメディアに注目しはじめたら、次にそれを既存のどの学術的枠組みで理解しうるのかを再度検討する必要があった。壁画は視覚的な表現を通じて、社会的・政治的言説を生み出し、広めるメディアである。したがって、それをどのような理論枠組みで分析するかが、研究の方向性を決定づけることになる。

最初に参照したのは、グラフィティ研究の枠組みであった。筆者が研究を始めた2000年代初頭には、マルチチュードの表現としてのグラフィティが注目されており、それは国家権力やグローバル資本に対する抵抗の表現とされていた (Hardt and Negri 2000=2003)。両者には表現手段としての類似性がある一方で、フィールドで観察を重ね、また描き手へのインタビューを行う過程で、北アイルランドの壁画は、むしろ地域コミュニティ内部の秩序のもとで制作されるものだということが把握できた。逸脱や反権力という面も確かにあるが、それ以上に共同体の主張や共通の記憶をめぐる表現の場として、より機能していた。したがって、グラフィティの枠組みをそのまま援用することは、本研究には向かないと判断した。

また、枠組みを定める参考にするため、他国の壁画運動の研究にも目を向けた。メキシコでは、壁画が国家の統合と文化的アイデンティティの構築の手段として活用されており (加藤1988)、またバングラデシュでは、独立戦争の記憶を地域住民が壁画として描く運動が行われている (五十嵐2016)。これらの事例は、壁画が「国民の記憶」や「民衆の記憶」を表現する手段となっていることを示している。壁画というメディアが芸術作品としてだけではなく、社会的・歴史的記憶の形成に寄与する役割が観察され、筆者の研究の方向性が妥当であるとの感触を得た。

他方で他国の壁画運動とは異なる点もあった。北アイルランドの場合は、描かれる記憶は「国民共通の記憶」ではなく、連合王国の枠内で英国の一員として生きることを求める集団 (ユニオニスト) の物語とアイルランド統一を求める集団 (ナショナリスト) の物語という複数のナラティブがせめぎ合いながら存在している。また同じユニオニストやナショナリストのなかでも、地域コミュニティによって、どの題材を多く描くかについてはバリエーションがある。壁画はそのような断片的な記憶を並存させるメディアであり、むしろ雑多な記憶が競合・共存す

る場としての性格が強い。そのため、集合的記憶の「構築」という面、またその「プロセス」への視点が、より重要になる。

そこで注目したのが、記憶研究の理論である。記憶研究の古典である『集合的記憶』で有名なアルヴァックスは、個人の記憶であっても社会的枠組みのなかで形成されると論じた（Halbwachs [1950] 1997=1989）。壁画というメディアは、まさにその「枠組み」の一部として、個人の経験を共同体の語りのなかに位置づけ、社会的記憶として可視化する装置である。一方で、記憶は、必ずしも共有されるものだけではなく、排除・忘却されることもあり、共同体のアイデンティティの形成に深く関わっている（Assmann 1999=2007）。

北アイルランドの壁画についての先行研究で特筆すべきものとして、現地の社会学者のビル・ロールストンの一連の研究がある。彼は、北アイルランドの壁画を紛争時代から記録・分析した。特に、*Drawing Support* シリーズを通じて、描かれる壁画の題材を政治・社会背景との関係と関連づけて読み解き、変化を時系列で明らかにし、それを「社会を映し出す鏡」として位置づけている（Rolston 1992, 1995, 2003, 2013, 2022）。彼の研究により、北アイルランドの壁画研究は、大きく進んだ。

とはいえ、壁画を〈鏡〉と捉え、主張を展開するには、より具体的な生成の分析が必要である。そうした手続きにより、こうした主張がより説得的なものになるだろう。実際、壁画の描き手は、様々な題材を描いており、同一人物が同時期に、ある場所には、「原理主義的」な作品を、別の場所にはそうではないものを描くこともあり、このような現象は、生成過程の分析抜きには説明しがたい。ロールストンのアプローチは主に壁画の内容とその時代背景との関連に焦点が当てられ、壁画が生まれるメカニズムやその社会的流通の構造——その〈生成過程〉

〈制作主体〉〈伝達の射程〉といった観点——にはあまり踏み込んでいなかった（壁画のメッセージの国際的な伝達機能を論じたものについては、Jarman [1998] の研究がある）。そこで筆者の研究では、ロールストンの研究の土台の上に立ち、その生成と変容のプロセスそのものに注目することで、記憶の構築をめぐるより動的かつ実証的な視点を導入することを目指した。

こうして筆者は、「壁画の生成を通して集合的記憶の動態を捉える」ことを通じて、住民の集合意識のありかたを探るという視点を定めるに至った。記憶の政治性と社会的文脈に根ざしたダイナミズムを重視し、壁画における表象の生成・循環・消失の過程を丁寧にたどることにより、紛争後の社会における感情の構造と記憶の配置を明らかにしたいと考えた。

課題3) 課題2のフィールドでの発見を踏まえて、あなたの取り組む具体的事例内容が、どのような研究上の意義をもつのか、あらためて考えてみよう。それが終わったら、研究の意義をよりよく伝え、明確にするための補足的調査や文献調査・分析を行っていこう。

5. 方法論の工夫と分析視点の明確化

理論的な枠組みが定まりつつあった段階で、筆者はそれまでにフィールドで得られた知見を踏まえて、分析の視点を精緻化していった。「壁画を通して集合的記憶の生成を捉えることで、住民の集合意識を明らかにする」という研究目的をより客観的に実証するには、さらにどのような具体的な視点でデータを整理し分析すればよいのか、検討を重ねた。

壁画を描くという事象は視覚的かつ空間的であり、また経時的に変化するものである。こうした特性を捉え、筆者は以下の3つの分析軸を設定した。

視覚イメージの「流通と循環」に着目する

壁画に描かれるイメージは、必ずしもその場限りの創作ではない。調査を進めるなかで、多くの壁画が、北アイルランドで広く知られた絵画や報道写真の画像を取り入れたり、紛争時代に地域コミュニティ内で配布されていたパンフレットや小冊子、ポスター、ポストカードなどの既存の図像をもとにアレンジしたりしていることが判明した。また逆に、壁画の写真が、学校教科書、博物館展示や観光ガイドなどに取り上げられ、社会のなかで再利用・再構成されていた。つまり、壁画は視覚イメージの「循環のなかの一地点」であり、静的な完成物ではないという認識が重要になった。

消えていく壁画への注視：「不在」を記録する

多くの研究では、新しく描かれた壁画の主題やメッセージに注目が集まる。しかし、筆者は「消された」壁画や、メンテナンスされず劣化していく壁画にも関心を払った。ある題材が描かれなくなること、あるいは塗り替えられることは、そのテーマが共同体のなかで優先順位を下げられていることを示唆している。「不在の記憶」もまた、集合意識のありかたを反映していると考えられる。

ある場所の壁画が消えたという記録は、新しいテーマで描かれた壁画や書き替えられた壁画よりも、記録に残ることがない。そのため、筆者は地図を用いてベルファストの街を区画ごと

に歩き、どこに何の壁画があるかを可能な限りすべて記録し、消失・変化も含めて経年的にデータ化していった（当時[2000 年代]はすべて実地調査による記録であったが、現在であれば Google ストリートビューなどを補助的に活用できるだろう）。

「どこに」「誰に向けて」描かれているかを分析する

壁画は場所によってその主題や描かれかたに大きな違いが見られる。例えば、大通り沿いの壁画は比較的広範な観客を想定し、ナショナル・ヒストリーや政治的主張を前面に出すことが多い（こうした壁画には、他の場所の壁画と比べて、キャプションがつけられる傾向がある）。一方で、住宅地の奥まった場所では、その地域出身者の追悼や若者へのメッセージなど、コミュニティ内部の記憶や呼びかけが前景化される。

また、同じエスノナショナル集団内でも、居住地区によって描かれる壁画のテーマや管理状態には違いが出る部分もある。これは、集合意識といっても一様ではなく、その空間での歴史的出来事や、そこに住む人々の経験に応じて多層的・断片的であることを示している。

こうした分析軸に基づき、筆者は壁画の「数」や「分布」、「主題」、「メンテナンス状況」などの記録を蓄積し、さらに関係者へのインタビューや参与観察（一部の壁画の製作現場や、壁画の地域住民へのお披露目である「オープニング」に参加）を通じて、その背景にある住民の語りや意図、葛藤を捉えていった。

壁画の「生成」のプロセスを詳細に追うことによって、対立感情と共感、被害者意識と和解の希求といった、紛争後社会に複雑に絡み合う集合意識のありかたが徐々に浮かび上がってきた。

6. 研究のオリジナリティは何か

フィールドでの調査と記録、インタビューや参与観察を通じて、壁画という視覚的メディアが、いかに特定の出来事や事柄を取り上げて表現し、それがコミュニティで受け入れられ共有されるのか、また変容したり、消失したり、一部は維持され続けたりしていくのか、その具体的なプロセスが明らかになってきた。そこで、当初の問いである「和平合意後の住民集団の集合意識はいかなるものなのか——何（どのような事柄・出来事）がどの場で想起され、いかに表現され、定着・変容していくのか？」という問いに対して、一定の答えを提示できるものになった。

特に明らかになったのは、集合意識は、複数の記憶や感情が重層的に交錯する構造をもつという点である。住民の集合意識は対立から和解へというような単線的なプロセスをたどるわけではない（Fukui 2017）。対立感情と相手に対する一定の理解、具体的な課題ごとの部分的な協力関係という、一見相反する動きが同時に存在している（福井 2014）。

住民の間には、制度的な和平プロセスと呼応するような新たな対話や理解が芽生えている。それは、紛争時代および和平合意後の復興のなかで、敵対してきた相手も、また共に苦しめられてきたという庶民感情をもとにした〈共苦〉といったかたちで表現されていた。さらに教育、健康、女性・若者支援といった、コミュニティの抱える、共通する課題の取り組みのなかで、対話や共同作業などはより進み、壁画においても、同じ課題を取り上げて同じ図案の壁画をそれぞれのコミュニティで制作するといった活動がみられた。

同時に、それぞれのコミュニティで受けた被害の記憶や犠牲者の存在は、忘れ去られることなく壁画に表現され続けていた。とりわけ自分たちの地域コミュニティ内の被害とそれへの抵抗は、実際に戦いや悲劇が起きた場所で、周年記念の時期に描き替えられ、一部は壁画の前で記念行事を行うなどして、繰り返し想起されていた。また、武装した人物像や原理的主張を描く壁画は、和平合意後減少したものの、武装闘争に関わって死亡したコミュニティ出身の人物の壁画は描かれ続け、そうした壁画は比較的頻繁にメンテナンスもされていた。

この発見により、住民集団の集合意識は単線的に変化するものではなく、対立と和解、記憶と忘却が交錯する動態的な構造をもつことが明らかになった。メッセージの対象や内容の検討を続けるなかで、対立の記憶は残りつつも、同時に対立とは異なる和平プロセスに関わる未来志向の壁画も描かれる。そしてそれは、壁画の描かれている具体的な〈場〉がコミュニティ内でどういった空間と位置づけられているのかにも大きく関わるものであった（福井 2015）。

アルヴァックスが述べたように、個人の記憶は社会的枠組みによって成り立っている（Halbwachs [1950]1997=1989）。壁画というメディアは、まさにその「枠組み」の一部として、個人の経験を共同体の語りのなかに位置づけ、社会的記憶として可視化する装置である。壁画に描かれる内容の変化、そして消されたり、劣化したりした壁画を含めた分析を通して本研究が示したのは、記憶がその時々で選別されているという事実である。また、壁画に描かれた（選ばれた）記憶は、しばしば新聞の報道写真や地域内に流通したチラシなど観客のよく知るイメージを採用することを通して、繰り返し想起される仕組みが見られた。

アライダ・アスマンは、記憶と忘却について、ただ保存されているだけで、普段はアクセス

されない過去（「蓄積的記憶」）と、現在のアイデンティティや社会的機能にとって意味のある過去（「機能的記憶」）の二つがあるという重要な指摘を行っている（Assman 1999=2007）。アクセスされない過去は、社会の状況や価値が変わることで、将来的には意味のある過去へと変わりうる。どのような過去が、和平合意後、北アイルランドのコミュニティで選別されているのか、本研究では壁画というメディアで実証的に明らかにした。

一方で、本研究によって明らかにされた成果には限界もある。とりわけ、壁画に描かれることのなかった記憶については、十分に検討することができなかった。地域コミュニティの支配的ナラティブに沿わない個人の経験や記憶は、周縁化されるだけでなく、しばしば不可視化される傾向にある。この点は、さらに掘り下げるべき重要な課題として残されている。

7. 問いの探索と研究：動態的プロセスとしての問い

本稿では、北アイルランドにおける壁画を例に、問いをどのように立てたのか、試行錯誤の過程を振り返ってきた。漠然とした関心から始まったこの研究は、現地でのフィールドワークと先行研究との往還を通じて、次第に具体的な問いへと形をかえていった。

調査の過程では、問いが一度で確定するのではなく、現場での発見によって揺らぎ、しばしば修正され続けるものであることを経験した。研究は、あらかじめ完成された問いをもって始められるとは限らない。むしろ、フィールドでの偶発的な発見に向き合い、見落としていた事実や自分の思い込みに気づくこと、そしてそれを、学術的にどのように位置づけることができるか考えることにより、問いが変化し、洗練されていくことは決して珍しくない。フィールドと理論の間を行き来しながら、問いを深め、更新していくことは、時間はかかっても、研究にとって必要不可欠なプロセスであろう。

文献

阿部利洋, 2007, 『紛争後社会と向き合う—南アフリカ真実和解委員会』京都大学学術出版会.

Arthur, Paul and Keith Jeffery, 1996, *Northern Ireland Since 1968*, Oxford: Wiley-Blackwell. (門倉俊雄訳, 2004, 『北アイルランド現代史：紛争から和平へ』彩流社.)

Assmann, Aleida, 1999, *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des Kulturellen Gedächtnisses*, München: C. H. Beck. (安川晴基訳, 2007, 『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』水声社.)

- 福井令恵, 2014, 「分断社会の二つの歴史と共苦: 北アイルランドのリパブリカン・コミュニティとロイヤリスト・コミュニティを事例として」『年報カルチュラル・スタディーズ』2: 113-130.
- 福井令恵, 2015, 『紛争の記憶と生きる: 北アイルランドの壁画とコミュニティの変容』青弓社.
- Fukui, Norie, 2017, "Murals in Belfast and Re-imaged Communities," *Eire: Irish Studies*, 36: 46-64.
- Halbwachs, Maurice, [1950] 1997, *La Mémoire Collective*, Paris: Albin Michel. (小関藤一郎訳, 1989, 『集合的記憶』行路社.)
- Hardt, Michael and Antonio Negri, 2000, *Empire*, Cambridge: Harvard University Press. (水嶋一憲・酒井隆ほか訳, 2003, 『〈帝国〉—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社.)
- 堀越智, 1996, 『北アイルランド紛争の歴史』論創社.
- 五十嵐理奈, 2016, 「政治・運動と視覚表現: 循環するバングラデシュの独立戦争イメージ」『NACT Review: Bulletin of the National Art Center, Tokyo: 国立新美術館研究紀要』3: 62-81.
- Jarman, Neil, 1998, "Painting Landscapes: The Place of Murals in the Symbolic Construction of Urban Space," Anthony D. Buckley ed, *Symbols in Northern Ireland*, Belfast: The Institute of Irish Studies, 81-98.
- 加藤薫, 1988, 『メキシコ壁画運動』平凡社.
- 松井清, 2008, 『北アイルランドのプロテスタント—歴史・紛争・アイデンティティ』彩流社.
- 南野泰義, 2017, 『北アイルランド政治論: 政治的暴力とナショナリズム』有信堂高文社.
- Rolston, Bill, 1992, *Drawing Support: Murals in the North of Ireland*, Belfast: Beyond the Pale Publications.
- , 1995, *Drawing Support 2: Murals of War and Peace*, Belfast: Beyond the Pale Publications.
- , 2003, *Drawing Support 3: Murals and Transition in the North of Ireland*, Belfast: Beyond the Pale Publications.
- , 2013, *Drawing Support 4: Murals and Conflict Transformation in Northern Ireland*, Belfast: Beyond the Pale Publications.
- , 2022, *Drawing Support 5: Murals Memory and Identity in the North of Ireland*, Belfast: Beyond the Pale Books.
- 酒井朋子, 2015, 『紛争という日常: 北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌』人文書院.
- 立川健二, 2000, 『ポストナショナリズムの精神』現代書館.
- 尹慧瑛, 2007, 『暴力と和解のあいだ 北アイルランド紛争を生きる人びと』法政大学出版局.
- , 2009, 「排除と包摂のはざまで: 北アイルランドという地政学的空間」後藤浩子編『アイルランドの経験: 植民・ナショナリズム・国際統合』法政大学比較経済研究所, 245-64.